
タイ語における外来語および外国語起源語

WILAILUCK TANGSIRITHONGCHAI

Loanwords in Thai

This article examines the introduction of foreign words into Thai. These loanwords, originating in Pali, Sanskrit, Khmer, Chinese and some other languages, have a long history of influence over Thai. Some have changed their original meanings; others have developed particular roles of usage. For example, Pali origin words are now mainly used for technical terms relating to the Buddhist faith. This article concludes with a summary of the characteristics of these loanwords, explaining how they have been absorbed according to history: the aim here is to help interpreters avoid misuse or misunderstanding.

はじめに

タイ語は英語をはじめとする屈折語である西洋語と違って、語形変化がない「孤立語」である。文の中で語形が常に一定しており、それぞれの語の文中における機能や働きを表示する標識がなく、形に表されないことが多いということがタイ語の最大の特徴である。そのかわり、語の配列順つまり語順によりその機能が決まってくるわけである。言い換えれば、文法的には単語が日本語や英語のように語尾を活用して使われることもなく、文法的関係は主として文中の単語の位置関係によって示される。具体的には、性、数、格、人称、時制などを表す標識もなければ、動詞や形容詞に活用もない言語である。それでも、コミュニケーションに支障を来さないのは基本語順（主語＋動詞＋目的語）と被修飾語＋修飾語という語順に加え、コンテキストの情報や一般的な知識を利用しているからだと考えられる。

例： khaw（彼）＋kin（食べる）＋som（みかん）＝彼はみかんを食べる。
khon（人）＋suai（美しい）＝美しい人、美人

このように、タイ語では要素（語、句、節など）と要素との位置関係や結びつき方についての理解がもっとも重要なポイントになる。

タイ語を学習する際には、語彙、文法、表現法など様々なタイ語独特の特徴の問題に直面するが、タイ語における外来語もその問題のひとつである。世界には、従来なかった新しい事物や概念、考え方を表現するために、自国語の中に別の言語から言語表現を借用・導入する国が多くある。外来語は単に新しい概念などをもたらすだけでなく、文学・芸術、学術研究、そして経済活

動をも豊にしてくれる。しかし一方では、外来語になじみがない人との間で、本当に伝えたかった意味や意味合いを伝わりにくくするという面ももっている。

日本語を見てみると、上代の漢語の導入に始まり、幕末・維新期の翻訳漢語の創成、近現代では西洋語からの借用など、長い歴史をもっている。その結果、現代日本語には和語、漢語、西洋語からの借用語などが使い分けられている。タイ語も日本語と同様、長い歴史の中で様々な外来語を受け入れ、タイ語へ同化し定着したものもあれば、タイ語への同化の度合いが低く比較的新しいものもある。日本語なら「やまとことば」ともいうべき本来のタイ語（純粋タイ語）に加えて、サンスクリット、パーリ語、クメール語などの借用語が日本語における漢語と同様、現代タイ語の主要部分を占めている。

そこで、タイ語を学習する際には、タイ語における外来語の理解も必要不可欠となる。タイ語にはどんな外来語が存在するのか、それぞれの外来語がどんな役割をもっているのか、そして、どんな特徴があるのかということを明かにすることが本研究の目的である。

タイ語における外来語および外国語起源語

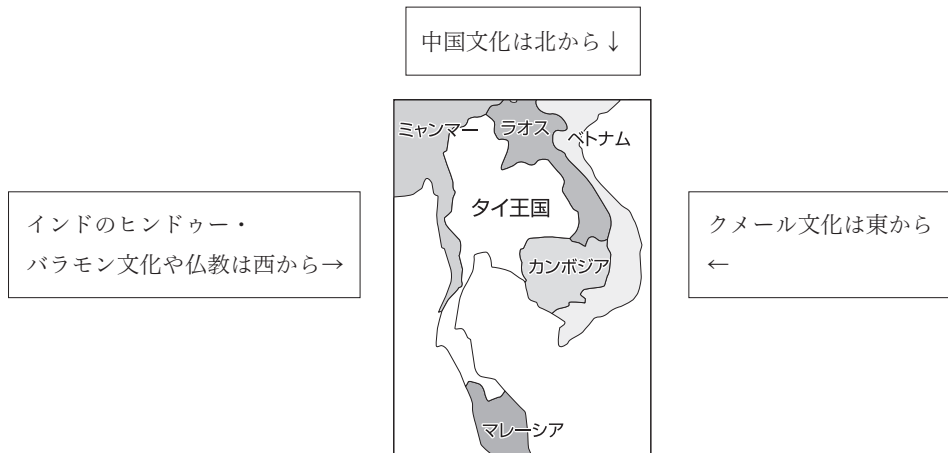
外来語というと、分類のカテゴリーによって概念の定義が異なるが、誤解を避けるために、本研究では、もともとタイ語に存在した固有語つまり純粋タイ語（一音節で意味がはっきりしているもの）に対して、別の言語から導入・借用した言葉つまり借用語のことを外来語（純粋タイ語より意味、つづりともに複雑なもの）と呼ぶことにする。

歴史的に見れば、タイはタイ人自身の独自の文化をもちながらも、クメール文化をはじめ、インドからのヒンドゥー・バラモン文化・仏教、中国文化や西洋文化に至るまで様々な文化を摂取してきた。こういった文化的交流によって、多様性を帯びた現在のタイ文化になっている。

当然のことながら、言語の面でも上記の異なる文化の影響によって、タイ語には多数の外来語が存在する。現代タイ語にはタイ語本来の単語つまり純粋タイ語のほかに、サンスクリットやパーリ語のインド系言語、クメール（カンボジア）語、中国語、英語などからの借用語もたくさん使われている。中でも、サンスクリットやパーリ語の借用語はタイ語の教養語彙（専門用語および高度な語彙）の大部分を占めているが、最近の傾向として情報技術産業の発展に伴い英語などの西洋語から借り入れる語彙が多くなってきている。

タイ語に使われている外来語はそれぞれ歴史的な由来・来歴・背景があり、タイ語に取り入れられた経緯にも違いがある。そのため、歴史的な背景や時代背景を振り返りながら、単語の出自をもとに分けると、次のように大別することができる。

1. サンスクリット、パーリ語
2. クメール語
3. 中国語
4. 西洋語
5. その他の言語



1. サンスクリット，パーリ語

サンスクリット，パーリ語は古くから借用され，現在ではタイ語と同化し，タイ語の一部となっているが，初めて文学作品などに明確に記されたのはスコタイ時代（13世紀）である。スコタイ時代は親子擬似政治という政治形態のもと，王が一国の父であり人民が子という考え方で王は人民を公正に寛容に統治していた。この時代はタイ人が政治的に完全に独立した国を成立させた時期であり，宗教や文化の面ではインドからのヒンドゥー・バラモン文化や仏教の影響を盛んに受けていた。しかし，バラモン文化はほとんどが国の儀式に取り入れられたのに対して，仏教は宗教として一般市民の間に，広く信仰されているため，国家仏教としても大変栄えていた。これらの文化の影響は以来アユタヤ時代（14-18世紀）や現代のラッタナコーシン王朝にも受け継がれている。こうして，サンスクリット，パーリ語は古くから仏教やヒンドゥー・バラモン文化とともにタイ語に融合されてきたわけである。

特に、『伝承』や『年代記』をみれば，サンスクリット，パーリ語はどれだけタイ語に影響を与えているかが明らかである。『伝承』は学識のある僧侶がパーリ語などで書き記した仏教の影響を色濃く受けた古文書で，人物伝，国づくりの記，仏教や寺院の由来縁起などの内容がある。また，バラモン教の神王思想を反映した王朝史である年代記は一般に宮廷学者が執筆し，王政の重要性を強調するものである。

このように建国時代からずっと続く長い歴史の中でサンスクリット，パーリ語はタイ語の語彙の中でタイ語への同化・定着が進んでおり，文化語彙のほとんどを占めている。これは日本語における漢語の役割と同様の役割を果たしていると言える。特に，パーリ語の多くはタイ語の仏教用語をはじめ，文章語としても使われている。

例： パーリ語を語源とする仏教用語

現代タイ語

sathuup (仏塔)

kam (カルマ＝「行い」という意)

語源となるパーリ語

sathuupa

kamma

suk (幸福)

sukha

専門用語および高度な語彙

現代タイ語

日常タイ語

語源となるサンスクリット, パーリ語

sariira

raangkaai (身体)

sariira

caksu

taa (目)

caksu

pheesat

yaa (薬)

pheesatcha

パーリ語・サンスクリット語による複合語

caksu pheet (眼科医) (日常タイ語では“moo taa” (目医者) を用いる)

pheesat saat (薬学) (日常タイ語では“wichaa ruang yaa” を用いる)

注：ここで挙げられている語源のパーリ語・サンスクリット語はタイ語の発音法によるもの。

2. クメール語

クメール語もサンスクリット, パーリ語と同様, 上述したスコタイ時代以前からタイ語に取り込まれているが, 特にタイ文字はクメール文字の影響を大きく受けて作られており, タイ語とクメール語が密接な関係にあることを示している。この文字の発明は言語や文学の面でも大変貴重なものとされているものである。このタイ文字は13世紀頃にラームカムヘーン王がクメール文字に範を取って作り, 石に記録させたものと考えられ, ラームカムヘーン王の碑文と呼ばれている。王の石碑には王の経歴, 王によるタイ文字の創作, スコタイ王国の慣習や版図などが書かれており, 当時の社会や文化を知る上で大変貴重な資料となっている。アユタヤ時代(14-18世紀)になると, 専制君主の政治形態に代わり, クメール文明を取り入れて, その影響がますます強くなったことが特徴である。この時代に王に対して使用する「王語」(宮廷用語ともいう)という特別の用語が作られたが, クメール語もサンスクリット, パーリ語と同様, その語源となっている。クメール文化を取り入れたことに伴い, クメール文化を支えたバラモン教の儀式も入ってきたが, ほとんど国の儀式に使われるだけにとどまった。仏教国家であるスコタイ時代の習慣を依然として受け継ぎ, 寺院を建てたり, 出家し仏門に入る王もいるほど, 仏教は国教であることに変わりはない。このように, 仏教, クメール文化およびバラモン文化がタイ国内でそれぞれ役割を果たしながら, 共存しており, 言語も含め様々な局面で影響を与えている。

現代タイ語にはクメール語の借用語は多数使われている。特に, 「王語」や文学作品には著しく多く見られる。

例: 純粹タイ語

食べる kin

眉 kiw

鳥 nok

月 duang can

クメール語の借用語

sawəəi (王語)

phra khanong (王語)

burong (文学作品などに使われる語)

bulan (文学作品などに使われる語)

3. 中国語

中国との関係はタイ初の王朝であるスコータイ王国の時代以前から続いており、ラームカムヘーン王の時代には中国に大使を送り、中国からも特使の派遣を受けるような外交交渉が行われた。タイと中国の友好関係を示す大変有名なものはサンカロークという中国から伝わった焼き物である。それ以降、貿易をはじめ、文化交流などを通じ中国文化および中国語の影響を受け続けている。しかし、タイ語にもっとも大きく影響を与えているのは北京語よりも中国語の方言のひとつ“潮州語”である。これは潮州語を話す中国人が古くからタイ全体に住んでおり、他の方言（例：広東語、福建語）を話す中国人と比較すれば、かなり高い割合を占めているためと考えられる。そのため、潮州語の影響はほぼ生活用語に限られている。

- 例： haang (店) 銀行などの“行”から来たもの
 siam sii (おみくじ) 「chiam sii」という語から来たもの
 kuai tiaw (麺料理) 「kuai tiaw」という語から来たもの
 huang cui (風水)
 muai (中国人の若い女性もしくは中国系女性) “妹”が語源
 tii (中国人の若い男性もしくは中国系男性) “弟”が語源

注：潮州語は漢字で書き表わせない言葉が多い話し言葉中心の方言であるので、原語の漢字がない場合がある。

4. 西洋語

アユタヤ時代（14-18世紀）に西洋との関係が始まったが、ポルトガルをはじめとしてスペイン、オランダ、イギリス、デンマーク、フランスなどが貿易やキリスト教の宣教活動を目的に次々タイへ来た。この時、西洋からは貿易の他に、様々な技術を受け入れ、例えば、砲弾の作り方、製薬方法、兵法、病気の治療法、食文化などを学んだ。ラッタナコーシン時代（18世紀以降）になると、西洋の帝国主義が広がり、タイもその勢いにより、国家の近代化を進めた。西洋との交流により、タイは社会構造、経済、科学、文化のあらゆる面で大きく変容したが、教育の面では、チュラーロンコーン大学や学校の設立および小学校令の制定など、本格的に西洋式教育制度が導入された。これは優秀な人材育成を必要とする国家の近代化だけではなく、西洋の帝国主義から国を守るためでもあったと考えられる。この改革により、上流階級の人々以外でも男女ともに教育の機会が得られ、知識人層という新しい社会集団が生まれた。そして、教育は社会的地位を規定する手段となった。そのために、当時他の西洋語より英語、フランス語が主流となっていたため、この両言語がタイ語に数多く取り込まれ、科学・技術、料理など様々な分野の新語彙が外来語となった。その影響は情報技術や科学などの分野が盛んである現在にも続いており、新概念を表現する言葉がたくさん誕生している。

- 例： (khanom) pang (パン) 語源はフランス語の pain である
 sabuu (石けん) 語源はフランス語の savon である
 kaafee (コーヒー) 語源はフランス語の café である

sammanaa	(セミナー) 語源は英語の seminar である
prai weet	(非公式, カジュアル) 語源は英語の private である
chek	(小切手) 語源は英語の cheque である
khompiwtəə	(コンピューター) 語源は英語の computer である

5. その他の言語

上記の外国語以外にも、まだ少数ではあるが、マレー語や日本語などがあげられる。マレー語に関しては、マレーシア国境に隣接しているタイ南部の地域で使われることが多いが、現代タイ語（標準語）にはそれほど顕著ではないので、ここでは日本語を取り上げることにする。

日本との関係はアユタヤ時代に遡ることができるが、アユタヤ時代には山田長政という歴史上の人物をはじめ、多くの日本人がタイに住んでいた。しかし、言語の面で影響が顕著になったのは戦後であり、現在では日本文化や技術・製品名などに関する言葉が広く知られている。

例: khaaraaooke	(カラオケ)
sunami	(津波)
raameng	(ラーメン)
khobotaa	(稲刈り機 (車)) 語源はクボタ社の稲刈り機である

タイ語における外来語の造語法および外国語概念の造語法

上述したように、タイ語は古くから様々な外来語を取り入れ、あらゆる工夫がなされている。タイ語に同化・融合させるなどして、外来語の雰囲気を感じないように、近い意味をもつ新しい表現を自らの言葉で作るという工夫がされること（外国語概念の造語法）もあれば、外来語の本来の意味を保つため、そのままの発音をタイ文字で書き表わすという工夫（外来語の造語法）もある。具体的には次のような方法があげられる。

1. タイ語外来語の造語法：語源となる言葉の発音をそのままタイ文字で書き表す方法（音訳）

タイ文字は表音文字であるため、外来語のあらゆる発音に対応可能であるが、基本的にはタイ語の音声体系を基準に子音や母音の音韻などを使って対応するが、対応不可能な場合は音韻の一部を変える工夫を加える。無論、多少ずれが生じるものもあれば、本来の発音に近いものもある。（例えば、「津波 (tsunami)」という語の「tsu」の発音はタイ語にはないので、「su」に変えて、発音する）本来の意味や概念を損なわないようにする場合、あるいは、タイ語には同義の言葉がなく、その概念を表現できないということがある場合はこの方法を用いる。現代タイ語の大部分を占めるサンスクリット、パーリ語、そしてクメール語はこのような手段で取り入れられ、現在では外来語の雰囲気を感じないほどタイ語として活用されている。王語や仏教用語などはこれにあたる。また、それ以外の新外来語、国名、人名などの固有名詞に対してもこの方法で対応することが多い。この方法はカタカナ表記による日本語の外来語と類似していると言える。

例：	語源	意味
sawəəi	クメール語	お召し上がりになる（王語）
kam	サンスクリット、パーリ語	行い（仏教用語）
khaaraaooke	日本語	カラオケ
sunami	日本語	津波
khompiwtəə	英語	コンピューター
theknoolooyii	英語	テクノロジー
kaafəe	フランス語	コーヒー

2. 外国語概念の造語法：語源となる言葉をもとにタイ語に既存している同義語で新語を作る方法（意識）

これは外国語に由来する新概念を取り入れ、意味的にそれにあてはまるタイ語で置き換える方法であり、サンスクリット・パーリ語を利用して同義語を作り出すことが多いが、純粋タイ語で作ることもある。ただ、サンスクリット・パーリ語による造語は高度な意味をもつもので専門用語が多いのに対して、純粋タイ語による造語の場合は一般語彙が多いということに注意する必要がある。

例：	造語の語源	意味
lookaaphiwat	サンスクリット・パーリ語 looka（世界、地球）＋aphiwat（発展、繁栄、進歩、増大）	グローバリゼーション
saarasontheet	サンスクリット・パーリ語 saara（内容、要点）＋sontheet（情報、通信）	情報、インフォメーション
khaaw pan	純粋タイ語 khaaw（ご飯）＋pan（にぎる）	握り飯
plaa dip	純粋タイ語 plaa（魚）＋dip（生）	刺身

注：握り飯、すしなどの食べ物については「onigiri」、「sushi」という言い方もできる。

3. 複合構造：上記の両方法を合わせ、造語する場合

これは外来語本来の意味および発音を同時に保つために用いる方法であるが、本来の意味、発音が損なわれないように（音訳）、その概念の一部をタイ語で表現する（意識）ので、聞き慣れない新しい言葉でもイメージが把握できるという利点がある。

例：	hoong suut（スイートルーム）：
	hoong（タイ語で「部屋」という意）＋suut（フランス語で「suite」という音訳語）
	khanom pang（パン）：
	khanom（タイ語で「お菓子」という意味）＋pang（フランス語「pain」の音訳語）
	という構造なので、何かお菓子で食べられるものというイメージが分かる。

上記の例で示されるように、タイ語の一般名詞 (hǎong, khanom) に外来語 (suut, pang) をつけるという形で造語するが、これはタイ語の語順 (被修飾語＋修飾語) に従うものである。

おわりに

以上、タイ語における外来語について述べてきたわけであるが、外来語は単に自国語になかった新しい概念を導入し、言語運用を豊にしてくれるだけではなく、歴史や時代背景を反映してくれるものでもある。日本語を学習する際に、和語、漢語を学習しなければいけないのと同様に、タイ語の一部として上記の外来語を学習する必要がある。これらの外来語は現代タイ語の中でどのような役割および意義があるかということをタイ語学習者に十分理解してもらえば、学習上の問題を少なくすることができるであろう。

参考文献

- 三上直光 (2002). 『タイ語の基礎』 白水社.
 「新『ことば』シリーズ 6」『言葉に関する問答集——外来語編——』文化庁 (1997).
 中央大学政策文化総合研究所監修 (2004). 柿崎千代訳『タイの歴史——タイ高校社会科教科書』明石書房.
 『タイ文化の魅力——歴史、美術、建築他観光ガイドの手引き』(1989). チュラーロンコーン大学成人教育センター.
 『国立国語研究所 第11回国際シンポジウム 世界の〈外来語〉の諸相 標準化・活性化を目指す言語政策の多様性』国立国語研究所 (2004).
 佐藤正文, ワッタナー・ウティチャムノン (1993). 『実用タイ語会話 1』泰日経済技術振興協会.
 Wisan Kotkaew (2002). "Pali and Sanskrit in Thai Language."